
IS < インフィニット・ストラトス > After sinking

杭打王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS > インフィニット・ストラトス > After sin
king

【Nコード】

N9870X

【作者名】

杭打王子

【あらすじ】

ラインアーク防衛で水没してしまうリンクス四名は、約11メートルのネクストが2メートル以下のサイズになってISの世界に飛ばされてしまった。

彼らは見知らぬ世界でいったいどのような生活をすごすのでしょうか？！

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿させていただきました。

この発想は某幻想入りのパクリ・・・なのかな？

文がひどい有様だと思いますがどうぞよろしくおねがいします。

ブローグ

ラインアークは今最大の危機が迫っている。

「政治屋ども リベルタリア気取りも今日までだな、貴様らには水底が似合いだ。いけるな？フラジール」

カロードのランク1オツツダルヴァ

「はい。そのつもりです」

アスピナ所属のcube

企業連に雇われた彼らは俺を潰しに来た。そう、ホワイトグリントを・・・

潰されてしまえばラインアークは重要な戦力を失い、反クレイドル活動はおろか、フィオナやラインアークの住民を企業の攻撃から守ることすらできなくなるだろう。

この最高戦力同士の戦いは企業とラインアークの運命を左右することになるだろう。

上の連中はこの襲撃の前、リンクスの試験としてここを襲撃したりリンクス・・・ストレイドを俺の両機として雇ったそうだ。

「ホワイト・グリント オペレーター、フィオナ・イエルネフェルトです。ご協力に感謝します。共に幸運を」

彼女は喋れない俺に代わって通信を担当をしてくれる、前は喋れて

いたのだがリンクス戦争最後・・・プロトタイプネクスト・ARETHAとの戦闘のさなかコックピットにコジマ粒子が混入、気管支がただれて喋ることができなくなった。

「こちらストレイド・・・あんたの両機だ・・・邪魔はしないようにする」

両機が通信をおくってくる。彼のアセンブルはAALYAHをベイスに右手にはMOTORCORA、左手にはMOONLIGHT、背部兵装はRESORが積んであり、ほとんどリンクス戦争で潰された企業のパーツで組んであった。

戦闘が始まる・・・

相手のステイシスとフラジールはどちらも空中戦特化型の機体だ。フラジールはマシンガンオンリーなので先に厄介なステイシスを先に落とす。

ストレイドも同じ考えのようだ。フラジールを無視して二機で攻撃を加える。

ステイシスはストレイドに向けて、弾丸と誘導弾でかく乱し回避先にレーザーバズーカを浴びせかける。

「戦場に迷い込んだのか？素人が…話にもならんな」

「くっ！落ちろお！」

ストレイドは被弾しながらプラスマキャノンをぶっ放している。

俺はステイシスの後ろに回り分裂ミサイルとライフル弾の弾幕で攻撃
後ろからの攻撃を食らうとステイシスは180度反転するとこちら
に実弾とレーザーを放ってきた。

（ストレイドとも距離がある・・・ここは・・・）

多少の被弾を覚悟で急速接近し^{アサルトアーマー}AAを起動、ステイシスを緑色の光
で包み込む。

「クッ、メインブースタが完全に逝ってやがる。ダメだ、沈んでい
く... こんなものが私の最期か...」

悔しさと失望の声が聞こえる。さっきの攻撃でブースタを壊しかけ
AAで止めを刺してステイシスを撃破する。

しかし、

「逝ってしまいましたか・・・しかし彼はチャンスくれた。」

通信が入る、フラジールの四門チェインガンが二丁、こちらを向き、
火を噴く。

さっきのAAで^{プライマルアーマー}PAは消えているホワイトグリントは弾丸の雨をも
ろにくらう。

「ホワイト・グリント、戦闘不能です。...彼はもう、あなたの助け
になれません。ごめんなさい」

ストレイドに送られた通信がこちらにも聞こえた。次の瞬間、海に着水・・・そのまま沈んでいく。

（結局、俺は誰も守れなかったのか・・・）

通信用キーボードに手を延ばし、

『すまない、フィオナ・・・』

という短い文を送信する。

そしてカメラは、二つの新たな波紋が海面にできているのを写す。それぞれの中心からネクストが沈んできた。

（相打ちか・・・この戦いの勝者は誰なのだろうか？）

そう思い、装甲が水圧でへこんでいくのを聞きながら目を閉じた。

そしてその数秒後声が聞こえた。

「その正体不明機！武器を捨て、手を上げなさい！」

女性の声だ・・・スピーカーからではなく、肉声だ。

そして“生身”で地面に立っている感覚がする。さっきまでネクス

トに乗っていて海に沈んでいたというのに・・・
目を開けるとパワードスーツを着た女性が数名、武器を構えて5メートルほど離れて囲んでいる。

「もう一度言う、武器を捨て、手を上げなさい！」

確かに何かを握っている感覚がある。確認すると051ANNRと063ANNARが握られていたことに驚き、自分の腕を見て驚く・・・

自分の愛機ホワイトグリントの腕だったのだから・・・

プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

いやーまずい、フラジールを強くしすぎたかも・・・まああつちに
行ったらもちろん紙装甲にしますよ。

さて今回はグリントさんが質問をされまくります。

感想待ってます。

E x a m i n a t i o n (前 書 き)

というわけで2話目できました。

今回は少し長めです。

では、どうぞ！

Examination

自分に起こったことはあまりにも唐突過ぎた。

目を開けたら360度ホールドアップ状態で

海にいたと思えば陸に立っていて、

生身だと思ったら、2mサイズのネクストだったからだ。

頭の中が混乱している中、パワードスーツを装備した女性が銃を構えてさらに近づいて来た。

俺は反射的に銃口を上げた、

するとパワードスーツ部隊全員がトリガーに指を掛けた。

「変な気は起こさない方がいいわよ。おとなしく銃を渡して」

とリーダーらしきブラウンのショートヘアーの女性が俺に話しかける。

確かにP Aを展開しておらずA Aが放てない今、複数を相手にするのは馬鹿だ。

（拘束するなら今すぐ殺されることは無いな・・・ここは従った方がいいだろう・・・）

銃口を下げ、逆にストックを上げ、銃を取るように促す。

銃の近くにいた女性がそれぞれ受け取る。

「そのミサイルもね」

リーダーが肩を指差しながら言う。

（背部武器もちやんと付いていたのか。）

バチッ！バチッ！いきなりパージすると、

「わっ！とつと」

さつき銃を受け取った女性が驚きながら、そしてハモリながらキャツチする。

「もう武器は無いわね？デイルン、ナタリー、後ろから付いてきて、武器は押収品倉庫に入れておいてね」

リーダーが指示をすると即座に二人が俺の後ろに回る。そして俺の装備は倉庫に持ってかれてしまった。

「じゃあ、付いてきて」

そういうと背を向けパワードスーツが浮き、床がせり出している所へ向かって飛んでいく。

（！？ジェット噴射してないぞ。どうやって浮いてるんだ？）

「・・・・・・・・早く行け」

銃でつつかれた。こんな経験はレイブン、リンクスになってから初めてだ。

マジかよ・・・ほんとにネクストになっちまったのか、俺は・・・

自分に何が起こっているかを考えながら連行されていた。今はエレベーターの中で、鏡に映った自分であろう物体を見ながら再確認する。もう一つ確認する点として、

ネクストの搭乗時に視界に映るAPの残量、ENゲージ、ECM濃度、レーダー、高度計が表示されている点があげられる。

武器情報、PAゲージ、ロックカーソルと狙撃点は武器を装備して
なく、PAを展開していませんため表示されません。

だがAMS特有の精神障害がない、これはいったいどういうことなのか・・・

高度計がどんどん下がっていくのを伝えてくる・・・-10・・・
-15・・・-20でとまる。

ドアが開くとリーダーが歩き出す、付いていくとなんとも重圧な扉の前にでる。

「さあ、中に入って、後で予想外事態対策官が来るから待ってて。」

中に入ると扉は閉まる。部屋には金属のテーブルと椅子が2脚が置いてある。イメージ的には映画ア・・・ロボットの取調べ室だ。

（俺はサニータ的なポジションなのか、同じ白色だし・・・何とか対策官が来ると言っていたな・・・きつとスプーナー刑事だろう。まあ、とりあえず座るか）

背もたれが無い椅子に座る。もう一方の椅子には背もたれが付いていた。背中いろいろな付いているからの配慮だろうか？

（・・・てか、ここどこ？建物的ではなくて、緯度・経度的な意味で。）

さっきまでずっと自分がネクスト化したことを考えていたから場所などはあまり考えていなかった。

（ラインアークから陸地まで何キロだったわけ？3000キロはあるよなあ、それを目を瞑っていた数秒で移動すんのはむりだよな。常識的に考えて・・・）

V・O・B・使ったって一時間以上かかるし、まず燃料がもたない。（目をつむった時点で死んで天国にいったのか？いや、それは無いな。）

「目を開けたら、銃口が・・・!？」

なんていう天国は地獄だ。そして地獄はこんな近代的ではないはずだ。

いろいろなパターンを考えるとむしろ頭がぐちゃぐちゃになっていく・・・

ブシュウと自動ドアが開く・・・お？スプーナー刑事？ウインクを見せてく・・・れ？

「貴様か、アリーナに突然出現した正体不明機とは・・・」

現れたのは黒のスーツを着る女性だった。雰囲気は霞スミカに似ている。彼女のつけていた小物はいつもピンクだったが目の前の女性はアクセサリー類をつけていない。

「ふむ・・・ISでは無いな、ならば無人機か・・・」

（ISって何だ？つかそれより！！）

「俺は人間だ！」

人間という存在を否定されたためそう言い返す。

（まあこのナリじゃ無理があるか・・・てか喋れたのか俺・・・確かネクストには拠点制圧のとき降伏させるために使うスピ・カーが付いてたな。）

「どこにそんな四股の付け根が細い奴がいる？それとも脳みそが入っているのか？」

「肉体は無いが心はある」

胡散臭そうにこちらを見てくる。

「そうか・・・では名前と年齢、性別を聞こう」

「機体名ホワイトグリント、パイロット名unknown、〇〇《ピー》歳、男、だ」

「フツ・・・名前も正体不明か。まあいい、私は織斑千冬だ。機体名とはその体のことか？」

「ああそうだ。デザインはネクストのまんまだがサイズが六分の一になってる」

「ん？ネクストとはなんだ？新しい兵器か？」

「ええ！？アーマードコア・ネクストを知らないのか！？」

「アの字すら聞いたこと無いな。」

（地上に住んでいながらアーマードコアを知らないだと！？ドンだけ平和なんだ！でもライフルを持ったパワードスーツがいたよな・・・）

「・・・・・・・・」

「・・・その話は後にしよう。ホワイトグリント、お前の目的は何だ？そしてどうやってアリーナの中に入った？」

「目的なんてのは無い。戦闘中にやられ、海中で目をつむったら声が聞こえ、目を開けたらドーム場の建物の中に立ってたんだ」

「^{ドレッジ}薬物乱用は？」

「やってねーよ！鎮静剤は結構使うが・・・」

原因はもちろんAMS精神障害、アスピナが作ってるやつは良く効く

「そうか・・・ではどこから来たんだ？」

「自由海上都市ラインアークの近海だな」

聞いたことが無いなという顔をする。

「すまん、国名から頼む」

「国？そんなのは十数年前に解体されたはずだが」

そう国家解体戦争・・・俺も死に掛けたからあまり思い出したくないな・・・

「おまえは何を言っているんだ。国連加盟国は現在192カ国もあるぞ」

「エエエエエエエ！！！」

国が200個もあつたときなんて50年ぐらい前だ。そりゃ驚くさ・

あちらはこっちの反応と質問の返し方にもしやと思っただのか

「まさかお前、別の世界から来たとか言うのか？」

「お、恐らく……」

この世界で聞くこと全てが自分の世界と違っているのだからそうなのだろう。

「ということは、ここがどこだか知らないのか？」

コクツコクツとうなずく

「ここはIS学園……」

と目の前の対策官、織斑千冬はこの世界のことを説明する。IS学園・IS・日本・世界情勢・アラスカ条約etc……

（なるほどこの世界の最強の兵器はISでありそのための条約まであり、そしてここはIS関係のことを教え込むために作られた日本の施設で、織斑千冬はこの教職員だそうだ）

「さてと、現時点で話せることは全て話した。次はお前の番だ……」

「

「わかった……まずはACノーマルから……」

自分がいた世界のことを千冬と同じように説明する。ノーマル・ネクスト・リンクス・コジマ粒子・企業・国家解体戦争・リンクス戦争・経済戦争・クレイドル体制・コジマ汚染etc……

「ふむ……つまりお前はそっちの世界の最強の兵器AC・ネクストに乗るリンクスで、撃破され水没したらその姿になってここに来たというわけだな？」

「ああ……」

（思い出したら心が折れそうだった・・・）

「まさかコジマ粒子がそんなに危険なものだったとはな・・・」

「ん？ここにもコジマ粒子があるのか？」

聞く限りでは問題になってなかったが聞かずにはいらなかった。

「ああ、あるぞ。そっちみたいに汚染を引き起こすわけじゃないが」

「それはコジマ粒子なのか？」

「話すより見せた方がいいな、待ってろ、今もって来る」

といい席を立つ

「え？あつ！ちょまつ！」

第一級の危険物を持つてくるといつているのだ。止めようとして当然。変態技術者どもなら止めることはしないだろう。

ブシューと自動ドアが開き千冬が部屋から出る。

（M A Z I K A Y O !もってこれんのあ！？百聞は一見にしかずっていうけども！それより侵入者から目を離してもいいのかよ・・・逃げる気は無いけど）

十数分後、千冬が戻ってきた。右手に禍々しい光を放つ粒子入りのコルク栓の子瓶をもちながら・・・

「び、びび、瓶詰めって・・・」

こつちじゃそんなことすればコジマが漏れて皮膚が焼け爛れだしますよ。

「そんなにビクビクするな・・・どうだ、そっちのやつと同じものか？」

（見た目は同じだな・・・P A 整波装置を使えば分かるか？）

そう考え腕部のそれを迫り出し、瓶に近づける。

「さっき言っていたP A 整波装置か、なるほど」

作動させるとコフオオオオという音とともに瓶の中の粒子が舞い始める。

「どうだ・・・？」

「本物です・・・」

整波装置をしまつと何故か安心した気持ちになった。自分がこの世界で生活しても大丈夫ということが分かったからかもしれない。

「・・・この世界でコジマ粒子はどんな扱いなんだ？」

先ほどは聞けなかったがこの安心感のおかげで聞けた。

「緑色に光るキレイなただの砂として知られている。人体には無害、そのためこのように瓶詰めすればキーホルダーになる。ただ摂取しても大丈夫だがかなりマズイらしい」

瓶を振りながらさういう。

（キーホルダーだと？あ、ありえねえトラスでもそんなことしねーぞ。しかも摂取って・・・誰か食べたのかよ・・・）

「それ・・・誰が持っていたんだ？」

「この教員の山田真耶先生が持っていて、前に500円で買ったそうだ」

「すげーなあ・・・そいつ・・・」

「こんなところか。これで取調べが終わる。・・・それと最後に聞くがここで働く気はないか？」

「へ？」

「つまり雇いたいと言っている。お前がそのままに出れば、騒ぎになり、捕獲され、ねじの一本まで分解されるぞ」

ゾツとする。さういうのはAMS接続プラグ手術で十分堪能した。

「お願いします」

「分かった。私はこれからお前のことを会議に掛けてどうするかを決める。最終決定は上だが、期待していてくれ」

そう言うと千冬は席を立つと自動ドアが開き、外に出る。
数秒後またドアが開いた、

「暇なのだろう？ならこれを読むといい」

渡されたのはなんと分厚い本だ。表紙には……

「IS学園へ、ようこそ！」

Examination (後書き)

歓迎しよう、盛大になー!!

今回も最後まで見ていただきありがとうございます。

コジマ粒子は無毒にしておかないといけません。有毒↓PA張れない↓ISに勝ち目なし↓マツハで蜂の巣↓ジェネレーターがイカレただと?↓コジマ汚染でさあ大変!になるからです。

少し長すぎましたかね?ご指摘願います。

それとできれば感想もお願いします。

今回は、リンクス?試験です。

Battle examination (前書き)

遅れましたが第3話です。

今回は長い・・・かな？それに比例して文法が・・・

ちなみに原作の時間軸は5月です。

では、どうぞ！

Battle examination

「おめでとう、今日から君はレイヴンだ」

懐かしい・・・かなり前のことだ。

「あなたにアナトリアの傭兵として戦ってもらいたい」

これは国家解体戦争の後、コロニー・アナトリアの中だ。

「ホワイトグリント、戦闘不能です。・・・」

これは・・・

「おい、起きろ！ホワイトグリント！」

ゴン！ゴン！とコアを叩かれる。脳みそに来る響きだ。無いけどな・
・

「ん？」

どうやらあの分厚い本を読んでいるうちに寝てしまったようだ。

この体は眠ると頭がコアに埋まっている状態（OPのアレ）になるらしい。

そして頭を外に出すと

「起きたか、さっきの格好はずいぶんと眠りやすそうだったな」

目の前には織斑千冬がいた。

「おゝ、千冬さん。会議はどうだった？」

寝起きでそう聞く。

「別にかまわないそうだ。というわけで学園警備員として雇う。」

（警備員ねえ・・・ネクストは防衛にむかないけど、まあいいか。
今までラインアークを守ってこれたし）

企業連は度々ラインアークにいやがらせ・・・もとい襲撃行ってくるのでそれから守るためにホワイトグリントで防衛していた。

「・・・あとISとの戦闘試験を受けさせるらしい。」

「ISと戦うのか？チュートリアルで？」

（訓練機体でネクスト戦のようなもんだよな・・・）

「上の連中はお前を高く評価しているんじゃないか？戦闘経験はお前の方が多い。まあ最強対最強が見ただけかもしれないが・・・」

不敵な笑みを見せる・・・まさか千冬が受けさせようとしたのか？
まあ、ISとネクストは場所が違えど、どちらも通常兵器じゃ太刀打ちできないほどの火力と防御力を持っている。

じゃあそれらをぶつけ合ったらどうなるんだ？とか思いついたんだろ。つまり某番組^{ほじたて}だ。

「俺の装備は？」

「第0アリーナに運んでおいた。そこで試験を受けてもらおう。あと、お前と戦うISは“ラファール・リヴァイブ”だ。」

どうやら第二世代型のISと戦うようだ。その機体は機動力優先型で癖が無く操作しやすいのと、対応している装備が豊富なマルチロール機だ。それなのにパイルバンカーが標準装備という玄人仕様でもある。

「わかった。試験はいつからだ？」

「一時間後だ。試験前に体を動かしたいか？」

「ああ、FCS、出力関係がどうなっているか調べたい」

機体のブースター出力知らなくてQB吹いたら壁にズドン！とかみっともなさ過ぎる。

「ならば、行こうか」

少し移動してピットに入る

「さて・・・俺の装備はこれだな・・・」

ライフル2丁は握れるがミサイルが付けられない・・・
(背中幅が大きすぎる・・・修正はいらないが)

「スマンがミサイルつけてもらえないか？手が届かない」

「ん、わかった。ここのジョイントだな？」

「ああ、差し込んでくれればロックできる」

千冬は軽々とそれを持ち上げ、一つずつ付けた。女性一人で持てる重さじゃないとおもつが・・・

「準備運動は、30分間やっていいぞ。私は管制室にいる」

「了解」

千冬がピットを出たのを確認し、

『AC戦闘モード、起動します。』

OSの音声を聞き、ピットからアリ・ナに出た。

「そろそろ時間だ。ピットにもどれ」

アリーナに付けられたスピーカーから声がする。

俺は30分間みっちりと六分の一サイズの機体を動かした。AMS
障害が無く、不快感もないみたいだ。

この世界では、ブースタの水平推力、垂直推力とクイック推力が前
の世界に比べて出力が上がっており、消費が少なくなっている（飛
び続けるのは無理）

PA整波装置は問題なく動作しPAがキチンと整波され、FCSも
異状が無いことが分かっている。

APの値は6分の一では無く、前の世界と同じだ。

分からないのは自分の装甲のレベルと、PAの厚さ、武器の威力、
AAの威力ぐらいだ。

『AC、通常モードに移行します。』

PAを解除した後、ピットに入り、置いてある長いすに腰掛ける。
数十秒後、千冬が来た。

「なかなかの瞬発力じゃないか。そしてさっきの緑色の膜がコジマ
粒子を使ったPAか？」

千冬の表情はコジマに興味がわいてきた。という感じだ。

この世界のコジマ粒子は生物に対する有害性がまったく無い。その
ためPAやAAを使用しても大丈夫だそうだ。

「ああそうだ。実弾がそれに当たると、速度が落ち、さらに分子が
分解され、威力が落ちる。レーザーの場合はコジマに当たって威力

が減衰する。」

「万能だな」

「しかし、攻撃を受けると安定還流が乱れてしまい、防御効果が低下する。」

「攻撃を受け続けたらどうなる？」

「最悪PAが無くなり、素っ裸になる。時間がたてば回復するぞ」

ほおと言う千冬・・・コジマには人を引き付ける何かがあるのか？
トラスしかり、アクアビットしかり・・・

「それはそうとあと何分で試験開始だ？」

「5分だ。私は試験準備をしておく」

機械だから肉体的な疲労は無いだろう？といいピットをでた。いや
みを言いやがったぞ。

「はぁ・・・コジマが無害・・・か」

もしそうだったら前の世界はどうなっていたのだろうか・・・ふと
考えていると水の球体が目の前を通過する。

「うおっ！？何だこれ?!」

無重力以外じゃできない現象に驚く、するとその球体がヘッドパ
ーツに突っ込んでくる。

「おおおおお！！???」

だが頭部スタビライザーに突き刺さって止まった。

「驚いた？」

いたずらが成功して喜んでいるような声が聞こえる。球体を付けたままカメラをそちらに向けると蒼髪の少女が扇子を持ちながら立っていた。

「……君はこの生徒か？授業中じゃないのか？」

つか立ち入り禁止じゃねえの？

「さっき終わったの、それよりあなたが朝っぱらからきた侵入者？」

と蒼髪の少女が質問してくる。別に答えてもいいかと思い

「そうみたいだな……」

と答える。

「ふん……ていうかあなた人？」

またそれか……勘弁してくれ。

「肉体は無いが心はある。名前もある、ホワイトグイントだ」

「あら、ごめんなさい。私は更識盾無、IS学園の生徒会会長よ」

目の前の少女・・・盾無は誇らしげに言う。そんなにすごいのか會長て

「この学園じゃ最強って意味なのよ？」

うお、なんか読まれた・・・

「そうなのか・・・それよりこの水球は何なんだ？」

「ふふっ、秘密」それじゃあね、白き閃光さん

ダッシュでピットから出る盾無

「え！？ちょ、ま！！・・・はぁ・・・」

なんなんだあの子・・・

するとドアから開いた扇子を持った腕が出てくる。扇子には激流と書いてある。

はて、何のことやら・・・

扇子がパチンと閉じられた瞬間、水球の形が崩れる。

「うおおお？！なんじゃこりゃー！」

胸部装甲に水がかかり、ピットの中で騒ぐ、もう一度ドアを見ても腕は引っ込んでいる。

「試験開始時間だ。アリーナに出ろ」

千冬の声がスピーカーから聞こえる。

「ぬおお、ちくしょうこのまま行くしかねえじゃねえか」

『AC戦闘モード、起動します。』

再びOS音声を聞き、PAを張りながらブースターを吹かしアリーナに出る。

アリーナの中央には、千冬の言った通り、リヴァイブが浮かんでいた。

自分もアリーナの中央に浮かぶと相手の顔が見えた。緑髪・碧眼で眼鏡を掛けている。俺をみるとこの姿に少し戸惑っているようだ。

「これより対IS戦闘試験を開始する。試験官は山田真耶先生だ」

（この人がゴジマ瓶を持っていた人か・・・機体も緑色だし、緑色がすきなのかな？）

「さて、この試験は、山田先生のシールドエネルギーを削りきるかホワイトグリントが圧倒的に不利になるまで行っ」

つまりこの試験に二度目はないが、生かしてもらえる。ということだ。

「よ、よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく・・・」

相手が挨拶をしてきたのでこちらも返す。

「あの、何で濡れてるんですか？」

「生徒のイタズラに会いました」

ああ、あの子ですね。と答える山田先生、会長のイタズラ好きは有名ならしい

「では、ブザーが鳴ったら戦闘開始だ」

さっきまで喋っていたがその声が聞こえると両者臨戦態勢を整えた。緊迫する瞬間だ。アリーナ、オーダーマッチでも体感している。

そしてブザーがなる。

それと同時に後退し、FCSがロックしたところめがけて2丁のライフルを連射する。今のところ腕の運動性能を超える速さで動いていないので弾丸はよく当たる。青いハニカムに弾かれているがそれでダメージは与えられているらしい。

相手もライフルを撃ってきた。弾速もなかなか、がPAに威力を持つていかれ、俺に当たるころには、装甲をへこませることすらできなくなっていた。対PA用の弾を使わないと、大体こんな感じになる

「あわわ、まったく効いてない・・・」

焦りの声を上げる。その間にも俺はスライド移動しながらライフルを撃ち続けシールドを削っていく。

すると山田先生は武器をマシンガン2丁に持ち替え、接近し雨を降らせてくる。

そんなの喰らったらPAが持たないので、距離をとりつつ右へ左へとQBを吹かしまくった。
アアアアアアアアアア!

十数発命中したが、臆することなくライフルを連射する。

「通常弾がだめなら榴弾で・・・！」

こんどはグレネードランチャーが出てきた。日本のグレネードは・
・マズイ・・・

ボン！ボン！ボン！と三連射。む、無理だ、避けられねえ

ドガアアアン！！

「やったか？！」

もくもくと煙が上がる。だがフラグ

「まだまだあいけるぜえ！」

と言い分裂ミサイル発射する。グレネードによる機体の損害はあまりなかった。どうやら防御力は前の世界と同じのようだ。

「ミサイルなら打ち落とす！！」

グレランをライフルに持ち替え引き金を絞ったがミサイルは弾を避けるように分裂した。

「えええええ？！？！そんなの聞いてな・・・」

ボボボボン！！

煙が空中でもくもくとたっていた。するとその中からリヴァイブがパイルバンカーを装備して急接近して来る。

「どおりやああああ!!」

遠距離戦じゃ勝ち目が無いと思って、近距離戦を仕掛けて来たみたいだ。だがそれはあまい、近距離武器が無いと思ったら大間違い。PA整波装置を隆起させカメラを閉じる。レーダーでISが射程に入るのが分かる。

コジマ粒子を圧縮し、AAを起動する。

「単純馬鹿が……」

「え？」

ズドガアアアアアン!!!!!!

ちよつと前の地上
一夏主観

今は放課後のIS特訓のため第三アリーナに向かう途中。

メンツはいつもの3人組だ。

「ふいゝ今日は大変そうだな」

「何がだ？」

「先生達、ほら朝のアレだ。侵入者がなんたらって、あつただろ？」

今日は朝っぱらから大騒ぎだった。鳴り響く緊急放送で騒ぐ生徒達。まあ、うちのクラスには千冬姉がいたからすぐ収まった。それでも騒ぐ連中は伝家の宝刀、出席簿で机に沈む。

その後、千冬姉は放送で職員室に呼ばれていったので今日の授業は山田先生オンリーだった。

そして山田先生の放課後の補修を受けようとしたら

「ごめんなさい、織斑君、今日は侵入者の件があるので無理です」と言っ、どツかに走って行ってしまった。

「ええ、なんだったんでしょね。ただの人間ならあそこまではする必要は無いですよわね」

口を開いたのはセシリアだった。ただの人間ならと言ったのは、普通の高校では普通に脅威だがIS学園では人間はおるか戦車で来ても脅威にならない、持って5秒、最速1秒の世界だと思う

「もしかして宇宙人とか？」

「まさか・・・それより一夏、来週からクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナの試合用調整があるから、特訓は今日までだな」

話題を変える筈、あと5分はあの話でいけるのにな・・・

「そういえばそうだったな」

「IS操縦もようやく様になってきたな。今度こそ・・・」

「まあ、私が教えてあげているんですもの。できて当然ですわ」

「ふん。中距離射撃型の戦闘法など役に立たない」

「それだったら篠ノ之さんのISを使用しない訓練なんて無意味ですわ」

「まーた始まったよ。言い争い、日英同盟が懐かしまれる。しらんけどそしてアリ・ナに付いた俺らは、ピットに入る。」

「おそかったじゃない、一夏!」

ピットにいたのは鈴だった。一瞬片腕が無いように見えたがちゃんと付いていた。

「何だよ、鈴」

話がしたいからここにきたのだろつ。ならば聞くしかない。

「早速で悪いけど謝りなさい!」

「はあ? 何で謝んなきゃいけないんだ」

「乙女の約束を踏みにじったからよ」

「約束は覚えてただろうが!!」

「意味が違うのよ、意味が!はあ、あつたまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね!??」

「説明してくれりや謝るつての!」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが!」

何が言いたいか分からない。今の鈴は人の言葉も解さんだろう。

「じゃあこうしましょう!来週のクラス対抗戦で勝った方が負けた方に一つ言うことを聞かせられるつてことでいいわね?」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうつからな!」

「アンタもあたしに謝る練習しておきなさいよ!」

「何でだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは!この朴念仁!鎧土竜!粗製!アホ!馬鹿はアンタよ!」

鎧土竜つてGじゃねえか。それは俺でもムカつく

「うるさい、貧乳」

あ、やべえ、危な――

ズドガアアアアアン!!!!!!

「な、なんだ!？」

よろめくほどの爆発がした。鈴を見ると動揺しているようだが腕がIS化していた。そしてそれを振り上げたままもてあましている。

「鈴・・・今のお前か？」

「違うわよ!それよりアンタ、言うてはならないことを、言ったわね!」

これは、マズイ、マジギレだ。

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』!?!今の『も』よ!いつだって――」

《異常な爆発を検知しました。生徒は職員の誘導に従って避難してください》

放送が入り鈴の言葉が遮られた。

「皆さん、大丈夫?こっちよ」

先生がピット入ってきて避難をうながす。

「チツ・・・」

舌打ちをする鈴、そして強く俺を睨んだ。
俺らは、避難中、一回も喋らなかった。

（鈴の一番気にしてることを言うなんて・・・謝らないといけ
ない・・・）

地下20メートル

W・G・主観

「・・・で、弁解はそれだけか？」

「本当にすみません・・・」

俺は今絶賛説教中（される側）、山田先生には勝ったんだが。

「ああ・・・こんなにしゃがって・・・」

アリーナの方を見て頭を抑えながら千冬が言う、
これはかなり・・・いや、すごくひどい。

特殊合金の床にはクレーターができ、その周りの床はめくれ上がり、
照明器具は全破壊と言うありさま。

原因はもちろんトールラス提供のアサルトアーマー

「はぁ・・・山田先生が死ななくてよかった・・・」

申し訳なさマックスのため息をつく

AAをもろに食らった山田先生はマッハで保健室行き

ついでに言つとくとリヴァイブは大破、ダメージランクはDを超えてこっちもマッハで整備室行き

「まあ、これで上の連中もお前の強さがわかっただろう。試験は合格、てところか」

「ありがとうございます」

「明日はいろいろと準備してもらつ。警備は明後日からだ」

こうしてホワイトグリントの学園生活（警備員）が始まったのだ。

Battle examination (後書き)

最後まで見ていただきありがとうございます。

ああ、うまく起承転結にまとめられてない気がする。

異様に長くなりましたが意見、感想お願いします。

次回はザ・警備員です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870x/>

IS < インフィニット・ストラトス > After sinking

2011年11月9日19時18分発行